

失敗の条件(1)

◇ トップの無関心

システムの導入は、業績に直接影響しないので、明確な方針をださず担当者任せにする。
システムは社運を左右するのでトップが深くかかわり、要件設定の細部まで指示する。

◇ 目標・効果を明示しない

システムの導入は業務の質の向上が目的なので定量化できない要素が多く目標もあいまいになる※1。

◇ プロジェクトチームのメンバーの選定

現場の忙しい人間は兼務が難しいので、現場で暇なスタッフを数合わせ充当する。
数合わせで多くのスタッフがプロジェクト推進メンバーで全員が兼務の構成。責任の分散、烏合の衆。

◇ 社内意識の変革・現場(利用者)の協力

システムベンダーに委託をしているので、ベンダー任せ。
システムの運用・データ入力現場の仕事だから、彼らからの要望を待てばよい。

◇ 導入教育の不足

システムを運用していくうちに覚えるので、ことさら教育する必要はない。
システムの機能の教育は情報管理部門に任せておけばよい。

◇ 業務改善が進展しない

業務改善・改革は必要だが業務を変えると混乱し改善イメージもつかめないなのでそのまま進める。
業務改善・改革の時間がないので、パッケージを導入して、これに業務を合わせればよい。

失敗の条件(2)

◇ 現場で入力されるデータの精度が悪ければ効果は上がらない

現場で間違ったデータを入力する。システム導入教育の不足。
マスターの継続的な更新作業がされていない。作業標準時間、顧客、価格等

◇ 現場管理者の支援がない、現場の抵抗

現場を上から管理するため、現場の抵抗を招く。
情報管理部門が技術偏重で、専門用語を多用する。
ユーザと開発者の溝は意外と大きい

◇ システム導入の目的と期待効果が明示されない

プロジェクトの目的や背景が十分に論議されていない。
システム導入の期待と効果の結果について現場の管理者が明言しない。
システムの利用者が誰で、何が要求されているかが明確にされていない。

◇ パッケージの機能を過信する

業務改善・改革の時間がないので、パッケージを導入して、これに業務を合わせればよい。
業務要件定義が不十分で、何をやりたいか、何を变えたいかが不明確である。
現状の業務が属人的すぎる

◇ プロジェクト予算・期間が初めから不足の上、隠れたコストを見落とす

初期投資と運用コストを正確に見積もらない

◇ 初めから完璧なものを指向しすぎ

① IT技術の変化がめまぐるしい、② 仕事の仕方(業務手順)が変化する、③ 開発時に予想できない仕様が発生する、④業務の多様化によりデータ項目・入力項目の追加・変更が頻繁。